

島の水, 島の火, 島々-グリッサンのために-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2013-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 管, 啓次郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13946

島の水，島の火，島々

グリッサンのために⁽¹⁾

管 啓次郎

1

黒檀でできた大男が棺に沈んでいる
 棺には水が張られそのせいで星を映している
 亀裂という名の川が流れしずかな海へと注ぐ
 その汽水域は悲嘆する海洋哺乳動物のすみか
 不在のかれらが見守る中を世紀の棺がゆっくりと進んでゆく
 島のひとつひとつが舟であり
 人のひとりひとりが自分自身の舟であることを証明するために
 移動は歴史の要請
 移住は心情の冒険
 マングローヴのもつれが四世紀の記憶を
 火として野に放つ
 野のひとつは思い出すことを禁じられた平原
 もうひとつは整然と区画された世界商品の耕作地
 国際航空網の末端につらなることをいまは止めて
 極度に錯綜した予測のつかない旅をはじめるといい
 彼だけが見た線，それは水平線に紙のように重なる島影

2

正確な地形が存在する
 ある際を，縁を，共有するとき

人は寡黙な交感のあり方を知るだろう
 三人の男とともに岬の断崖に立ち海を見やりながら
 あなたは情感と思惟の組み立てに必要な語彙を学んだ
 クローデルの宇宙には荘嚴なオルガンが響き
 地球がまるで箱庭のように小さくなった
 サン・ジョン＝ペルスは不可解なペルシャの聖人
 古代と現代が二つの電極のように西欧化される
 ヴァレリーはもっぱら逃げることを教え
 そうしたければ沈黙を選ぶことも戦略だと示唆した
 それから右手、はるか下に広がる湿原を見やると
 初老の小柄なアメリカ人が長靴姿で歩いてゆくのが見えるだろう
 猟銃を肩にかつぎルイジアナ産の青い目の猟犬を連れて
 プランテーション世界の余白を身をもってしめしている
 フォークナー、世界の鍵の当てにならない管理人

3

学校に夜はなく夜に学校はない
 砂糖黍の死者のための焚火のまわりに集い
 闇の中で Maitre-la-nuit（夜の親方）の語りに目を輝かすだけ
 幾千の通夜がそうして遠い土地の記憶を伝えてきた
 Yé, kric!
 Yé, krac!
 パトワ（島言葉）が語るありえない不思議の物語を
 デレクとその双子の弟は隣の島で英語で聴き取り
 おれたちはフランス語で震えながら聴き取った
 学校がそれらの文字により
 おれたちの耳を歴史的に造形したからだ
 学校にとって島などなかったが島にも学校が建てられ
 やがて記憶は文字により花卉のように整列する
 それは忘却に等しい
 あらゆる機会を捉えて忘却に対する反乱を起こすのが
 文字を覚えたわれわれが夜に対して負う義務だった

4

Maître (師よ), あなたが島に帰りル・ディアマンの岩を見ると
 凝固した海の岩は幾万年の眠りから目覚め
 みるみる溶け出すでしょう
 海が沸騰する, 青が赤くなる
 エメラルドがルビーを経て無色のダイヤモンドへと変質する
 原初の溶融と温度の極限をもういちど体験するために
 そして吹きつける強い, 強い風が
 海のざわめきに世界の理知を忍ばせる
 活火山と休火山が連なり形づくられた列島だ
 島たちは風を動力として世界に散らばる
 マークス・ガーヴィー (ジャマイカ) は北米へ
 ジョージ・パドモア (トリニダード) はガーナへ
 フランツ・ファノン (マルチニック) はアルジェリアへ
 エメ・セゼール (マルチニック) は世界/複数世界へ
 そしてあなたも島を出て以来さまよいを続けた
 予測不可能な溶岩たちに火急の連結を呼びかけるために

5

「いま砂浜は, 苦悩にみちた転換期にある
 砂の色は混乱している
 それは鈍くも明るくもなく
 けれども空気と風の質に合っている
 海は, この季節らしからぬ泡立ちぶりだ
 海の岩礁への襲撃は, まもなく
 おさまるだろうと感ぜられる
 震える水面が, 海を, 散乱する光で包んでいる」⁽²⁾
 だがあなたはもちろん知っていた
 転換期でない時など砂浜にはなかったと
 永遠の律動の反復も季節の回帰も

そのつどの特異な展開を刻んでいた
 合言葉はただ opacité のみ
 事実および意志として引き受けられる「不透明性」のみ
 この荒涼とした明るい風景 (paysage) が、砂浜 (plage) が
 そこを歩む者に逸脱を約束させる

6

出発はそのつど新しい人生をもたらした
 生後一ヶ月、母は私を抱いて
 聖マリーを去った、ブゾダンのモルヌ (山) の
 神話となった小さな村だ
 そこから向かったのがラマンタンの平野
 砂糖黍の生産のための従順な土地
 私は皮肉にもそこで文字の国を知った
 それから十八歳、奨学生としての私は
 パリに向かった
 Bio-graphie とはいつも土地への書き込み
 離れるたびに引きちぎられるのは
 この肌、この肉、この混乱した回想と知識
 だが風景の思考はつねに新たな relation をもたらず
 むすびつく、私は轉身する
 語る、私は多数化する
 私の根と根それ自体がマングローヴとして成長する

7

「自分が話す言語が
 それがいかにひとつの言語であろうともその中で
 単一言語使用的ではない道を探る
 そのとき多言語主義が始まる」
 あなたはそんな風にいていた
 いいかえるならひとつの言語と名指されるものが

どれだけの他の言語，外の言語によって編まれているか
 その輪郭にどれだけのほころびがあり中継点があるか
 それをつねに自覚しながら自分の使用言語と他の言語との
 あいだに生じる共鳴とうなりを聴き取ることだ
 それにあらゆる言語は別の土地，別の邦を知るたびに
 新たな語彙と語法を開発し別のプロトコルを生き方に取り入れる
 新たな風景が流れ込みそれでそれだけ多くの結び目をもつようになる
 帝国の言語はつねにそれだけ大きな危機にさらされる
 多くの魂がそこに住み着く
 言語的な土着化は反乱ともう変わらない

8

現実と回想のあいだで，萌芽的な世界システムが
 かれらに苛酷な海を渡らせる
 此岸にはもう生がなく
 彼岸を此岸にするしか生存はない
 来る日も来る日も暗闇の母胎に横たわり
 血をたぎらせ，煮えてゆく
 衰弱し，瘦せてゆく
 一日に一度白い海を見せられ
 うねりによるめきながら忘却に背中を刺される
 生活と系譜を破壊され
 言語や弦の響きを忘れることを強いられ
 糖蜜と塩漬けの鰯を食いながら
 使役獣として残りの日々を生きてゆけというのか
 船足を軽くするためには鉄球を足首にむすんだまま
 われわれは海に投げ捨てられた
 そんな鎖が大西洋の海底に点々と続く

9

おれたちはこの島に到来した

おれたちはこんな生活を強いられた
 強いられたものに承服できないとき
 逃げることを以外の何が生として意味をもつのか
 山へ行け、森へ行け、山へ行け
 平野のシステムに別れを告げ、山の伝統を創設しよう
 海面から吹き上がる強い風に乗って
 渦巻く雲が生命と記憶を掻き乱す
 ここですべての異質なわれわれが
 新たに出会い、新たに樹木と草を知る
 おれはまだきみの言葉を知らない、おれはきみの言葉を話す
 おれはきみをきみの言葉において理解することを通じて
 きみの言葉を少しずつ学んでゆく
 植物学と言語は手を携えて成長する
 Marronage (奴隷の逃亡) とは正確にいて知識の戦いだ
 生存のための

10

すべてはすべてに coprésent なのだから
 現在は空間的に未来に直結し
 過去は物理的に現在において現在を造形しているだろう
 そしてわれわれは未来において過去を現前させる努力をする
 そんな並列の意志の果てに
 見られたことのない光があるのだときみは信じてくれ
 聞かれたためしのない言葉が生じる
 それがクレオル化 (créolisation), ひとつのシステムの創設のために
 大洋を渡することを強いられた者たちが
 なお個々の土地に住みこむことにおいて
 Le divers を開発する (多様なるもの/逸れてゆくもの)
 そのための思考が errance (さまよい)だ
 つねにすべてを他所から見ようとすることだ
 征服と拡張を拒絶することだ
 「一」が砕け散って「多」と「他」になる

その光を物陰から窺うようにしてわれわれは明日を掴む

《注》

- (1) Edouard Glissant は 1928 年 9 月 21 日にマルチニックの山間部の村サン
ト＝マリーで生まれ、2011 年 2 月 3 日にパリで亡くなった。フランス語を表
現言語とする詩人・小説家であり、カリブ海域に根ざしながら全世界の運命を
その強靱な想像力によって捉えようと試み続けた、現代のもっとも重要な思想
家のひとりだった。
- (2) エドゥアール・グリッサン『〈関係〉の詩学』（管啓次郎訳、インスクリプト、
2000 年）161 ページ。ただし句点を削除し改行をほどこした。